

勇者の条件

——太宰治「走れメロス」論——

佐々木義登

「走れメロス」は昭和十五年五月号の『新潮』に掲載された。後に河出書房刊の『女の決闘』に収録され、昭和名作選集二十八『富岳百景』に再録された。教科書にも採用され、太宰作品の中では「人間失格」に匹敵する知名度を誇っている。先行論も多く、現在まで様々に論じられてきた作品である。本稿ではこれまでの研究史を簡単に整理しつつ、「走れメロス」の読みの現代的な問題と提示し、考察したい。

かつて「走れメロス」における研究史はおおむね作品を信頼と友情の賛美、または善のメロスが悪のディオニスに勝利するといった構図を読み取ることで支えられてきた。

幾多の危機を乗り越えて信実を守りぬいた喜びにむせぶメロスは、王の嘲笑に屈せず友を信じていたセリヌンティウスと相擁してうれし泣きに泣くのであるが、ここに至り、このふたりの姿を見ては、さしも心のねじけた王も感動した。

この長谷川泉の論が作品内部の読みとしては代表的であり、それ以外では、

『走れメロス』の主題は、彼一生のテーマであった「義」であり、「信実」だということは明瞭である。これは更に聖書の「隣人愛」⁽²⁾ともつながるものである。

とする東郷克美の論⁽²⁾、また長部日出雄の以下のような指摘も広義で同質のものと考えてよいだろう。

この作品が、やはり、いまの若い人たちにひろく読まれている、という話を聞いたとき、それも当然だろう……とおもった。『走れメロス』には、破壊型と呼ばれている太宰の、そのレットルとは相反した向日性が、もっともよくあらわれているからだ。向日性は、少年の特質である。

次に挙げた奥野健男の評は前述のベクトルが最も示されたものであった。⁽⁴⁾

人間の信頼と友情の美しさ、圧政への反抗と正義とが、簡潔な力強い文体で表現されていて、中期の、いや太宰文学の明るい健康的な面を代表する短編である。

また一方で作家論的な立場から独自の見解を示す批評家もあった。

メロスを支えるパトスは〈信頼〉という絶対に対して異様に激しく燃え上がっている。彼が信じているのではない「信じられている」のだ。太宰がこのメロスの姿を一瞬に英雄視しているわけではない。疑惑の心、懐疑の心を人一倍持っていたこの作家は、やみくもに〈信頼〉というひとつの〈関係〉についてのイデーを大書して見せたのである。おそらくこれを書いていた作者は、このメタフィジックな主題のかげにひそむその裏の地獄を、〈信頼〉と〈被信頼〉のもたらす地獄を、もう一方から（恐らくはかつて彼の信頼を裏切った小山初代のことを思い出しながら）暗い、ものがなしい眼でみつめてもいたに違いない。

上総英郎⁽⁵⁾は短い評の中で「向日性」、「太宰文学の明るい健康的な面」を評価する長部や奥野の解釈の背後に目を向けようとした点において興味深い。

実際問題として読みの方向性が変化したのは、平成に入ってからのことである。信頼、友愛の賛美を下地にして次段階へ、もしくはそこから脱却をはかろうと、さまざまなアプローチが行われた。

平成四年に発表された花山聡の『「走れメロス」考——メロスは誰のために走ったのか——』⁽⁶⁾の意義は大きい。花山はメロス＝正義、ディオニス＝悪という対立の構図から脱却することを掲げる。従来のメロスの正義にディオニスが感動し王がメロスとセリヌンティウスの位置まで引き上げられたという構図ではなく、むしろメロスが道行の過程でディオニスの苦悩の次元にまで同化したのだとする。したがって王はメロスの行動を通して人々への信頼を取り戻

したのではなく、自分が信じるに足る存在をメロスに見いだしたにすぎないと言う。メロスの道行きの過程で体験する懊悩が、王の不信を体感するものであったとし、変化したのがむしろメロスであったとする読みはある意味エポックとなった。

また平成五年に発表された、田中実「ヘメタ・プロット」へ——『走れメロス』——⁽⁷⁾は別な意味で「走れメロス」解釈の歴史に一石を投じるものであった。田中の論を根底から支えているのはテーマと構造の齟齬である。友情、信頼といった近代の倫理的問題を、神々に愛されるメルヘンの構造の中に展開したがゆえに、テーマが作品全体の叙述から浮き上がり、両者の齟齬だけが明らかになってしまったという。田中はこの矛盾を「破綻」という言葉を用いて批判した。

具体的に田中が注目したのは、作中、妹の婚礼に出席したメロスの心理描写、さらに翌日セリヌンティウスの元に戻ろうとする場面のメロスの逡巡である。該当する部分を抜き出してみる。

祝宴は、夜に入つていよいよ亂れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなつた。メロスは、一生このままここにゐたい、と思つた。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分のからだで、自分のもので無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、つひに出發を決意した。——中略——
 少しでも永くこの家に愚圖愚圖とどまつてゐたかつた。メロスほどの男にも、やはり未練の情といふものは在る。

さらに村を発つた後も、次のような描写がある。

走らねばならぬ。さうして、私は殺される。若い時から名譽を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかつた。幾度が、立ちどまりさうになつた。えい、えいと大聲擧げて自身を叱りながら走つた。

この場面を指摘した田中の論を引用する。

もし、メロスがセリヌンティウスに真実、心の底から詫びるとすれば、疲労の極限で見た「悪夢」よりも、まず健康で丈夫なときのこの人並みの人情を発揮したことこそ詫びるべきだったのではないか。

批判は「走れメロス」が近代的倫理というテーマを扱っているという前提から発している。つまりメロスの倫理的問題を扱うという内実と神のやどるメルヘンという枠組みが噛み合っておらず破綻しているというのである。だからこそ疲労の極限で、戻ることを一瞬放棄してしまったことよりも、正常であったときに頭をよぎった逡巡こそが問題にされるべきだと述べる。メロスの世界観の振り子は状況に応じて極から極へと揺れ動く。小説ではそうしたメロスを「わけのわからぬ大きな力」に引き摺らせ大団円を迎えさせたと見るのが田中の論理であった。

田中の見解に端を発して「走れメロス」に対する新たな読みが提示されることになる。田中に真つ向から対立する論を発表したのが若杉俊明⁽⁸⁾であった。若杉は田中が論の根底に据えた「友情、信頼といった近代の倫理的な問題」自体を批判する。メロスと王との戻る戻らぬのやりとりが「信実」対「不信」の対立ではなく、ひ弱であるが知的な精神の権化である王と、強靱な肉体と激情とを持つ勇者との間の「賭事」の材料になっていると言う。さらにメロスが刑場へ向かって疾走する場面では、「賭けに勝つ」から「遂行すること自体」へ意味が変貌しているとする。若杉の結論を抜粋してみる。

確かにこの物語は、メルヘンであろう。王に象徴される、近代的知性的だが他者との齟齬をきたす精神の世界は、メロスを中心とした古代的なメルヘンの世界、すなわち激情と肉体だけで幸福を得る世界によって完全に崩壊したのである。この作品のテーマもそこにあり、「信実」「友情」「愛と誠」などは、メロスが激情をかきたて、肉体の力を引き出すためのお題目に過ぎないものであった。

メロスたちは、激情とそれを可能にする肉体の勝利のために生きていた。そこに近代性を見ることは不可能であろう。もちろん、メルヘンの住人たちは、「約束の絶対性」などは言うまでもなく、「肉体の優位性」にさえ、普段は無自覚である。彼らがふとそこに気付く時、彼らは決まって「赤面」という反応を示すのである。

若杉は「信実」「友情」などはお題目に過ぎず、作品のテーマは激情と肉体が幸福を得る古代的メルヘンの世界であり、ゆえに「走れメロス」には近代性はないと断じる。

また若杉とは一線を画す形で新たに問題を提起したのが戸松泉⁹である。戸松は若杉ほど意識しているわけではないが田中の論を視野に入れつつ問題点を指摘している。

末尾で「勇者」としたこの小説の語り手は、そんなメロスの世界をどこかで〈お話〉のなかだけのこととする他なかったのだろうか。私自身はメロスは語り手を置き去りにしたまま別の小説的世界を顕現し読者に感動を与えた、私達の日常のなかでこれだけの〈信賴〉に結ばれた人間関係がどれだけあるかという〈問い〉を投げ掛けしている、と読むのだが、その解釈は別れるところであろう。

「語り手」がメロスを「〈お話〉のなかだけのこと」としたのか、メロスが「語り手を置き去りにしたまま別の小説的世界を顕現」したのかとの問である。戸松は後者と読んでいる。メロスがどこから問うているのかは明確ではないが、この戸松の問は意義深い。

以上「走れメロス」に関する昨今の研究を大まかではあるが追ってみた。特に後半に取り上げた四人の論者の論文にはそれぞれに注目すべき点があり、今後の「走れメロス」の研究にも少なからず影響を及ぼすであろうと思われる。これらの論を意識しながら本文の解釈を始めたい。

2

筆者は「走れメロス」のテーマを以下のように考えている。

本作品の骨子はメロスが自らの命が奪われる状況に戻ってくる物語である。この物語のダイナミズムは信実のために己の命を差し出す、そのプロセスにある。自らの命を差し出すと、一時の感情に任せて言うことはできる。しかしそれを実践するとなると話は別だ。しかも三日間という時間、意志を維持し続ける強度が試される。その状況下に置かれた人間には様々なドラマが生まれるはずである。死を全面的に受け入れるまでの人間のドラマがである。

繰り返すが「走れメロス」はメロスの行為が、自らの命と引き換えであることが前提にある。メロスが走り始めたモチベーションは、「信実」を示して「死ぬため」であった。そして人間が自らの命を差し出すためには何（どんな理屈や力）が必要なのかがある意味「走れメロス」には書かれてある。

しかし我われは「走れメロス」の内容を知りすぎている。メロスが最後に死なないことも、暴君の王が、仲間の人にしてほしいと言うことも、群衆の歓声が起こり、少女がマントを捧げ、メロスが赤面することも。あらかじめ知ってしまったその事実から逃れることができない。可能な限りそれらを捨て、予備知識なく読むことができたらどんなによいだろうか。

結果的にメロスは助かるが、最後の数行までメロスは死ぬことが前提であった。「王様万歳」と後に歓声をあげた群衆が何のために刑場にいるのか、それは本来セリヌンティウス、もしくはメロスの処刑を見るためである。メロスとセリヌンティウスが涙を流して抱き合った後、メロスが処刑されることは前提であったはずだ。メロスも刑場に着いた時点で「殺されるのは、私だ」と言っている。

「走れメロス」の力点を「友情、愛、正義」のどれか、もしくはこれらの複合体においても、読みの可能性は膨らむ一方だ。現に作中、めまぐるしくこれらは変化する。むしろ天秤の反対側に置かれた「信実を示して死ぬこと」を基準にすえて、そちら側から照射すべきではなからうか。メロスが道行の三日間で自らの命の対価を何に求めたか、それがどのように変化したかを見てゆく必要がある。

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ」と言いながら、刑場に入りセンメンティウスの足に齧りついたとき、メロスは彼なりに「死」を自分のものとしている。それは「走れメロス」冒頭部分の王とメロスのやりとりから見える薄い「死」の意識とは大きな開きがある。メロスがいかなる経緯でどのように「死」を自らのものとしたのかを考えてみたい。そしてメロスはなぜ死ななかつたのかという問題についても、様々な観点から考えねばならない。

3

小説前半、メロスにとって対象としての「死」は、非常に粗末な概念として置かれている。「邪悪に対しては、人一倍に敏感であつた」メロスは、暴君ディオニスの所業に激怒し彼を殺そうとする。「勸善懲悪」に従うメロスは王の行動に死をもって贖わせようとする。メロスにとって死は形而下の問題である。

メロスは、単純な男であつた。買ひ物を、背負つたまま、のそのそ王城にはひつて行つた。

「語り手」はそのようなメロスを「単純」、「のそのそ」と語る。肯定的ではない。むしろ浅はかで愚鈍な人間と表現している。

王とメロスの会話部分を抜き出してみる。

「口では、どんな清らかな事でも言へる。わたしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまへだつて、い

まに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」

「ああ、王は慥巧だ。自惚れてゐるがよい。私は、ちやんと死ぬる覺悟で居るのに。命乞ひなど決してしない。ただ、——」と言ひかけて、メロスは足もとに視線を落とし瞬時ためらひ、「ただ、私に情けをかけたつもりなら、處刑までに三日間の日限を與へて下さい。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうち、私は村で結婚式を擧げさせ、必ず、ここへ歸つて來ます。」

「ばかな。」と暴君は、嘎れた聲で低く笑つた。「とんでもない嘘を言ふわい。逃がした小鳥が歸つて來るといふのか。」

「さうです。歸つて來るのです。」メロスは必死で言ひ張つた。

メロスへ発せられた王の言葉を要約すると、死を意識しなければどんな「清らかな事」でも言えるが、磔になれば「泣いて詫びる」と言うニュアンスである。それに対しメロスは「私は、ちやんと死ぬる覺悟で居るのに。命乞ひなど決してしない」と答える。ただ村で妹の結婚式をあげるために三日間だけ猶予がほしいという。あきれれる王にメロスはこの後人質を差し出すと言ひ出す。

あらためて言うまでもないが、すでに戸松泉が指摘しているように、メロスの行動と、王とのやり取りは不自然である。思いつきで王を殺そうと城へ乗り込み、捕縛される。磔にされるとなると、死ぬ覺悟はできているという。一方で情けをかけてくださいと訴え、三日後に帰つてくると約束し、独断で人質を差し出す。これらの言動はどうてい尋常ではない。しかもこのメロスの言動を裏付けるものが、メロスの単純さゆえであることは疑いようがない。登場人物の愚昧さを推進力にして物語を押し進める方法にはいささか疑問を感じるがここでは保留しておく。

王の「磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ」の言葉に対する反応も、「命乞ひなど決してしない」といっ

た自尊心の顕示が先走っている。ところが「ただ、私に情けをかけたつもりなら、處刑までに三日間の日限を與へて下さい」と直後に言葉を翻し王に願いを乞うている。

表層的な会話の中で発した、「死ぬる覺悟」に込められたメロスの自尊心の顕示がすべての発端であったことは注目に値する。セリヌンティウスはメロスの「死ぬる覺悟」を示すために人質にされているのだ。そもそもメロスは王に対して、磔になった状態で「死ぬることの覺悟」、「その場に至つても命乞いをしない」ことを証明することが目的であった。一方でメロスの申し出を聞いた王は次のように思う。

それを聞いて王は、殘虐な氣持で、そつと北叟笑んだ。生意氣なことを言ふわい。どうせ歸つて來ないにきまつてゐる。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。さうして身代わりの男を、三日目に殺してやるのも氣味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に處してやるのだ。世の中の、正直者とかいふ奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願ひを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに歸つて來い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。ちよつとおくれて來るがいい。おまへの罪は、永遠にゆるしてやらうぞ。」

興に乗った王の中では三日目の日没までに歸つてくる、こないということが主眼に置かれる物語へ変化しているのである。

こうして「走れメロス」は王にとっては（「三日目の日没までに歸つてくる」）「信実の証明」、メロスにとっては（「信実の証明」）をして磔になること）、二人の認識がずれたまま、物語は以降語られる。

メロスが妹の結婚式に出席する場面、先にも引用したが、メロスはそのまま佳き人たちと生涯暮らしたいと願う気持ちに襲われる。この心境はメロスにとってこの日が妹、ひいては村人たちとの永の分れとなるとの認識が発生したからだ。これは他でもないメロスが「死」を認識したからこそおこる迷いであつて、王と話していた冒頭部分の意気燃えた口調とは明確に異なる。

田中実はこのメロスの心境を、セリヌンティウスに対して「まず健康で丈夫なときのこの人並みの人情を發揮したことこそ詫びるべきだつたのではないか」と批判した。田中のメロスの逡巡に対する指摘は、「走れメロス」のプロットが最終的に「信実の勝利」に行き着かざるを得ないとする事を支えにしている。そのような結論から翻つて考えれば確かに健康な時点でのメロスの逡巡は批判されうる。しかし筆者は、結末が「語り手」のレベルにおいてメロスを肯定的に描いているとは考えていない。また「信実の勝利」でもないという結論に達した。このことは後に詳しく述べる。

したがつてここでのメロスの迷いは、単純に「死」を意識することと起る、親しきものへの未練と考⁽¹⁾えたい。未練の情は戻ることそして死ぬことが前提にあるからこそ起ると思つて差し支えないのではないか。

村を後にして走り出した後も、メロスの未練は継続する。

私は、今宵、殺される。殺される爲に走るのだ。身代わりの友を救ふ爲に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る爲に走るのだ。走らねばならぬ。さうして、私は殺される。若い時から名譽を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。幾度か、立ちどまりさうになつた。

「身代わりの友を救ふ」、「王の奸佞邪智を打ち破る」その二つによって、あくまで「私は殺される」という認識である。メロスが「死」を了解する上で、最初に試練となったのが肉親および村人への情だった。メロスがこの未練を振り払うのは隣村までたどり着いてからである。

またこの部分に関連して触れておきたい一文がある。「メロスほどの男にも、やはり未練の情といふものは在る」である。

戸松はここに込められた「語り手」のニュアンスを次のように解釈している。

語り手はあくまで〈セリヌンティウスの友情〉にりっぱに応えることを期待している。メロスが自己規定した〈勇者〉であることを強いている。ここには語り手の示すアイロニーが露わである。シニクな語り手は、単純なメロスが期待に応えられるか興味津々の思いで眺めている。

筆者もこれとほぼ同意見である。先の王城に入ってゆくメロスの「単純」、「のそのそ」といった描写でも触れたが、「語り手」は一方でメロスの勇敢さや正直さを強調しながら、他方では愚鈍なメロスの姿を冷笑している。このようなメロスの描き方は他にもある。例えば隣村を過ぎて身内への未練がなくなったころのメロスの描写である。

私には、いま、なんの氣がかりも無い筈だ。まつすぐに王城へ行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆつくり歩かう、と持ちまへの呑氣さを取り返し、好きな小歌をいい聲で歌い出した。ぶらぶら歩いて
二里行き三里行き、(以下略)

はたしてメロスのこのような態度に読者の共感は得られるであろうか。「呑氣さを取り返し」、「好きな小歌をいい聲で」、「ぶらぶら歩いて」などの表現は特に「語り手」の立ち位置がよく現れている。よしんば能天気さ、楽天性が勇者の特質だとしても、このような勇者の特質を「語り手」は肯定的に見ているとは思えない。⁽¹²⁾

この「語り手」の問題は最後に作品の根幹に関わってくると筆者は考えている。一度保留し本文の読解を継続する。「未練」の次に、メロスの試練となったのは「肉体」という物理的な問題である。

濁流の川を渡り、盗賊の襲撃に会い、いずれも克服したものの、メロスは疲労困憊して、ついに身動きができなくなる。その状態でメロスの脳内に浮かぶのはセリヌンティウスへの謝罪の念である。

ありがたう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思へばたまらない。友と友との間の信實は、この世で一ばん誇るべき寶なのだからな。セリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、みぢんも無かつた。信じてくれ！

さらに王に対する思いが続く。

私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になつてみると、私は王の言ふままになつている。私は、おくれて行くだらう。王は、ひとり合點して私を笑ひ、さうして事も無く私を放免するだらう。さうなつたら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切り者だ。地上で最も、不名譽の人種だ。

この思考経過は先の第一の試練の「身代わりの友を救ふ」、「王の奸佞邪智を打ち破る」ために、をなぞっている。そしてこれらは最終的に「死」と「生」の問題へ収斂される。

ああ、もういつそ、悪徳者として生き伸びてやらうか。村には私の家がある。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追ひ出すやうな事はしないだらう。正義だの、信實だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかつたか。

メロスはこうして一時は、すべてを放棄し四肢を投げ出してまどろんでしまう。しかし水の音に引かれて身を起し泉の水を飲むことで疲労を回復し今一度、精神力を取り戻す。

肉體の疲勞恢復と供に、わづかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名譽を守る希望である。——中略——私を、待つてゐる人があるのだ。少しも疑はず、靜かに期待してくれてゐる人があるのだ。私は、信じられてゐる。私の命などは、問題ではない。死んでお詫び、などと氣のいい事は言つて居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。

メロスの心境にもう一段の変化が見られる。しかしそれはやや混乱している。「わが身を殺して、名譽を守る希望である」と「私の命などは、問題ではない」の記述である。実はこの直後に走り出したメロスは「私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ」、「正直な男のままにして死なせて下さい」とも言うのである。一方で「私は、信じられてゐる」、「私は、信頼に報いなければならぬ」はこの後もくり返し語られるキーワードである。

5

やがてシラクスの市の塔楼が見える場所にまでメロスはもどつてくる。そこでセリヌンティウスの弟子であるフィロストラトスがやつてきてメロスに告げる。

「ちやうど今、あのかたが死刑になるところです。ああ、あなたは遅かつた。おうらみ申します。ほんの少し、もうちよつとでも、早かつたなら！」

さらにフィロストラトスは次のように言う。

「やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平氣でゐました。王様が、さんざんあの方をからかつて、メロスは來ます、とだけ答へ、強い信念を持ちつづけてゐる様子でございました。」

フィロストラトスがどんな経緯で、メロスに対しこのようなことを言う状況に至ったのかは明確にされない。しかしフィロストラトスの発言がメロスにとって走り続けることの意味をあらためて問うことにはなっている。「身代わりの友を救う」ことはメロスにとっては大きな使命の一つであったはずだから。しかしフィロストラトスに対し、メロスは次のように答えた。

「それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの爲に走つてゐるのだ。ついて来い！ フィロストラトス。」

「間に合ふ、間に合はぬは問題でない」、「人の命も問題でない」とはどういう意味であろうか。しかもそれらと「信じられてゐるから走るのだ」の関係はいかなるものなのか。また「恐ろしく大きいものの爲」とは何なのか。「語り手」が直後にメロスの心理を次のように語る。

最後の死力を盡して、メロスは走つた。メロスの頭は、からつぽだ。何一つ考へてゐない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた。

フィロストラトスへ答える時点で、すでに「身代わりの友を救う」ことは意味をなさなくなっている。同様に「王の奸佞邪智を打ち破る」ことも問題ではない。「人の命も問題ではない」のであるなら、メロスにとって「正義の士として死ぬ事」もはや問題ではなくなっている。では「信じられてゐるから走るのだ」とはどういうことか。それは直前にフィロストラトスが言う「セリヌンティウスのメロスを待つ思い」以外に考えられない。さらに「恐ろしく大きいもの」とは何か。もしそれがセリヌンティウスの「信頼」であるなら直接そう書けばよい。がそうではない。ならこの記述は「語り手」のキャパシティを超えた「恐ろしく大きいもの」としか書けないものであると考えるべき

だろうか。その後、ついに走るメロスの頭はついに空っぽになる。何一つ考えてはいない。「ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた」とある。

筆者はこの一連の状況を以下のように考えた。

「信じられてゐる」ことという自らの外側に理念が持ち出されることによってメロスの「走る行為」そのものを支えていた大義名分が形を失い、最終的にメロスは空っぽの器になった。中身のなくなった空っぽの器に、己の外側の世界の意識が注ぎ込まれてくる。メロスを引きずつて走らせるほどの外側の世界の意識とは、しいて言うならメロスに「走ることを要請する思念」とでも言えるものであるか。器だけになったメロスの頭の中に、自分の外の世界から「語り手」にも「わけのわからぬ大きな力」としか書けぬそれが流れ込んでいる。結果メロスは己に要請する力に引きずられるようにして走り、刑場の中に入って行つた。

田中実「わけのわからぬ力」に關する部分を次のように指摘する。⁽⁷⁾

「わけのわからぬ力」とは何なのか。

そもそもメロスは「太陽の、十倍も早く走つ」ている。〈語り手〉が地の文でそう説明しているのであるから、これを単に暗喩と解すべきではなく、一種の〈奇跡〉がその〈ことば〉通り起こっていると解すべきであり、とすれば、その「わけのわからぬ力」が小説の結末、ことを成就させたと理解されなければならない。つまり、この「力」とは人間なるものを超越し、人智を超えたもの、神なるものの「力」と言わざるを得ない。

田中の言う、メロスを太陽の、十倍も早く走らせているのは「語り手」が掌握した世界の範疇に属すると筆者は解釈している。そもそもメロスが刑場に帰るまでに多くの試練を課されたのも、すべて登場人物メロスの外側で、なおかつ「語り手」の力が及ぶ範疇である。メロスの精神的な、もしくは肉体的な試練、一方で瀕死になったときの奇跡、

励ましや勇気付け、これらはすべて「語り手」の手中にある。「語り手」は「走れメロス」の物語をほぼ完全に掌握している。そういう意味でメロスにはまったくといってよいほど自由はない。

しかし一箇所だけ「語り手」の力の及んでいないと思われる部分がある。それはメロスが「なんだか、もつと恐ろしく大きいものの爲に走つてゐるのだ」と言い、「語り手」さえ「わけのわからぬ大きな力」とメロスの言葉をくりかえすことしかできない部分である。

メロスの外側であり「語り手」の内にある「力」なら、神とでもゼウスとでも呼んで差し支えない。しかしその「力」が「語り手」をも超えた位置から働いており「語り手」さえ「わけのわからない」としかいえないなら、それを「語り手」の手中にある「神」の「力」と等しく理解してよいだろうか。

一方、戸松泉は⁽⁹⁾この力を次のように解釈している。

メロスとセリヌンティウスの二人の間に結ばれた〈信頼〉を指していると考える他ない。メロスの中で実感としてつきあげてくるものであったと思われる。それは、二人以外の人間には到底理解の及ばない領域の問題であった。

——〈中略〉——

語り手はメロスが何も考えず頭をからっぽにして「走つた」という。語り手はメロスを走らせる力をただ、「何かしらの大きな力」「わけのわからぬ大きな力」としか語れない。メロスが自信を持って言う「もつと大きいもの」という捉え方とは明らかに差異がある。語り手はメロスと一体化するかのように見えても、メロスを突き動かしていく力をこれ以上に説明することができないようである。〈信頼〉感とは本来そういう性格のもの、メロスの内側からわきあがってくるものであったと思われる。

戸松は「語り手」がメロスを突き動かす力を説明することができないことを的確に指摘している。「信じられてゐる」ことを經由してメロスが空っぽの器になったのは確かである。しかしもし戸松の言うように「力」が「信頼」であるのなら、なぜ「語り手」はそう語らないのだろうか。今まで「語り手」はメロスについて多くを語ってきた。「メロスには政治がわからぬ」、「メロスは単純な男であつた」と語っている。政治がわかるかわからないか、単純かそうでないか、これらはメロスが自身で規定していない。「語り手」がメロスの自覚の外側からメロスを規定している。メロスが「語り手」の手中にあるなら、メロスにとって了解外の力でも「語り手」は語ることができる。にもかかわらず、なおかつ語らないとすれば、それは対象を了解していながら韜晦しているか、「語り手」のさらに外側から力が働いているか、のどちらかであろう。

しかし文脈からは「語り手」がメロスの発言をそのままぞつていようようにしか読めない。つまり「語り手」にとつてもやはり「わけのわからぬ大きな力」なのである。とすれば「語り手」の外側から働いているこの「大きな力」に、「神」や「信頼」といったニュアンスを持たせることに懐疑的にならざるを得ない。

ここまで考えた上で筆者はこの「語り手」すら「わけのわからぬ」とされる空白部分に「関係概念としての「作者」」(実体概念としての「作家」ではない)を抽出するよりないと考える。「関係概念としての「作者」がメロスに「語り手」の外側から走ることを要請している。「語り手」の背後から働く力として、やむを得ず「大きな力」に、「関係概念としての「作者」」による「走ることを要請する思念」という表現を用いざるをえない。筆者はここにメロスに対して猛烈に走ることを要請する「関係概念としての「作者」」を見出しえると考える。「わけのわからぬ」という「語り手」のメタレベルから「作者」は明らかにメロスに「走れ」と要請してはいないだろうか。

この後、刑場にてメロスとセリヌンティウスの間で互いに、信実を失いかけたことへの罰を与え合い、抱擁しあう

場面が続く。一見ハッピーエンドに見える最後の場面、ここに「語り手」の仕掛けた「走れメロス」の大きな構造上の問題があると筆者は考えている。

もとをたどれば、冒頭部分にまでさかのぼる。繰り返すが、王にとってはメロスが（三日目の日没までに帰ってくる）、「信実の証明」であり、メロスにとっては（「信実の証明」をして磔になること）、が出発点であった。そして、この最後の場面においても二人の認識は基本的にずれたままなのである。

刑場に入ってきたメロスは刑台に昇りながらこう叫んでいる。

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにゐる！」

メロスはこの場でも、しっかり自分が死ぬことの自覚がある。頭の中が空っぽになる状況にまで己の自意識を捨て去り、メロスは言わば道行きを経て、今「死ぬ」ことをそのまま受け入れられる境地に達した状態にいるのである。しかしディオニスの言葉とともにストーリーは次のように展開する。

「おまへらの望みは叶ったぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信實とは、決して空虚な妄想ではなかった。

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへらの仲間の一人にしてほ

し。」

どつと群衆の間に、歡聲が起つた。

「萬歳、王様萬歳。」

メロスは最終的に死を自らのものとする。しかし「死」を獲得したメロスは、結果、王にとっての「信実」を証明することになり死ぬことが出来なくなった。磔にされるために戻ってきたメロスは、戻ったがゆえに死ぬなくなる。もはやメロスにとってはどうでもよくなった告白を王から受けるばかりか、王とともに彼は群集から賞賛される立場

に立たされる。

6

先に挙げたように戸松泉は、最後にメロスを勇者とした小説の「語り手」がメロスを「お話」のなかだけのこととしたのか、メロスが「語り手を置き去りにしたまま別の小説的世界を顕現」したのかと問うた。戸松は後者と読んだが、筆者は戸松が選択しなかった前者の立場を唱えたい。

メロスは結果的に、「信実」を具現化したことと引き換えに、王など足元にも及ばぬほど「信実」に対して懐疑的な「語り手」によって、現実から遊離したメルヘンの世界へ閉じ込められたと見るのは飛躍にすぎるだろうか。

「走れメロス」のラストはあきらかに「語り手」の手中にある。メロスにとって一度は「死」を獲得した物語は、「語り手」によって「信実」を具現化させた物語に引き戻されている。「語り手」言説にしたがえば、「信実」を具現化させるには、天真爛漫、言い方を変えれば本性的な愚かしさが必須条件であったともいえる。「語り手」はメロスを激励しつつ彼の愚鈍さ単純さへの冷笑や揶揄を中繰り返し返してきた。つまり「信実」の具現化は、それほど現実的ではない。もし実現されるとしたら、愚鈍で単純な勇者によって神話的メルヘンの中にしかありえない。

「信実」に突如目覚めた暴君が、自らの過去の罪を忘却して「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった」、「おまへの仲間の一人にしてほしい」と口にし、それまで圧政により虐げられていた、(しかもメロスらの処刑を見物に来ていた)民衆が「萬歳、王様萬歳。」と叫び、友セリヌンティウスとともに、天真爛漫な古代的メルヘンの世界にメロスは立たされる。そして全裸の勇者は、少女から好意を寄せられ¹³ひどく赤面しながら、いわばこのユートピアめいた狂気の「神話的メルヘン」という世界へ幽閉される。

最後のメロスの赤面は作中「語り手」の最もシニカルな表現と見える。すべてを捨て去り、己を器にすることで一度は死を超越したかに見えたメロスが、この行為によって簡単に形而下的性愛に引き戻されているからである。メロスが、少女の態度一つで、たちまちエロス（生）を回復するのをもまた、この勇者の特質だと「語り手」は言うのだろうか。

筆者はこのようなプロットレベルの結末の解釈をネガティブにとらえたくはない。「信実への懷疑」それ自体は決して「否定」ではないと思う。むしろ懷疑は概念を鍛えるための必須作業といえる。絶え間なく繰り返される懷疑に打たれることで概念は強度を増す。とすれば「走れメロス」における、残酷な無邪気さをまとわされた「語り手」によるメロスの「メルヘン世界への幽閉」という行為にもそれなりに意義があると考ええる。

そして最後に、協力的でありながら、一方でシニカルな「語り手」のメタレベルから、一箇所だけ大きな力で介入した関係概念としての「作者」の意味を考えねばならない。筆者には、最後に走ることをメロスに願った「作者」は、シニカルであった「語り手」とは明確にポジションを異にしていると見えてならないからだ。

「作者」が介入してメロスに要請した、走ることの意味は何であったのか。「語り手」によって語られるように、刑場へ入る直前、メロスは「頭は、からつぽだ。何一つ考へてゐない」という状態に至った。それまで死を前提に据えるメロスのモチベーションを保持するのに必要であった、「友情、愛、正義」と言った大義名分がメロスの体から剥離し、走るための任意の理由が失われたとき、彼にとって生きていること、存在していることは「走る行為」それだけに特化されてしまう。

繰り返しになるが、それまでのメロスのレゾナントルは「友情のため走る」、「愛のため走る」、「正義のため走る」等、様々な概念をともなっていた。しかし「友情、愛、正義」といった走るための任意の理由が失われた瞬間、メロ

スの存在そのものは、唯一「走る行為」のみになる。つまり走る意味を失ったメロスに「作者」が「走る行為」を要請することは、メロスがその瞬間生きて存在することそのものへの要請と同義になる。

「作者」が「語り手」のメタレベルから介入するタイミングは、メロスが身に覆っていた既成概念をすべて剥ぎ取ったこの場面において他にはない。死を獲得することは同時に今生きてあることの実感に他ならない。だからこそメロスにとってのレゾンデートルが、「走る行為」そのものに純化されたとき、「作者」はメロスに「走れ」、すなわち今この瞬間を「生きよ」と要請するのである。

使用テキスト

『太宰治全集4』 筑摩書房 平成十年七月

注

- (1) 『走れメロス』鑑賞 長谷川泉 国語通信 昭和三十四年五月
- (2) 『走れメロス』をめぐって 東郷克美 國文學解釈と教材の研究八巻五号 學燈社 昭和三十八年三月
- (3) 『走れメロス』小さな巨像 長部日出雄 朝日ジャーナル十月十二日号 朝日新聞社 昭和四十八年十月
- (4) 『走れメロス』(解説) 奥野健男 新潮社 昭和四十二年七月
- (5) 『太宰治と聖書』上総英郎 教文館 昭和五十八年五月
- (6) 『走れメロス』考——メロスは誰のために走ったのか—— 花山聡 成蹊論叢 平成四年十二月
- (7) 『メタ・プロット』へ——『走れメロス』—— 田中実 都留文科大学研究紀要三十八 平成五年三月
- (8) 『疾走する激情と肉体』——『走れメロス』再論—— 若杉(藤平)俊明 Groupe Bricolage 紀要 平成八年十二月
- (9) 『走る』ことの意味——太宰治『走れメロス』を読む—— 戸松泉 相模女子大学紀要 平成八年三月

- (10) 戸松泉は、「走る」ことの意味——太宰治『走れメロス』を読む——のなかでこの場面に触れて次のように述べる。「邪悪に対しては「人一倍に敏感」というように、邪悪それ自体を憎むとか否定するとかいう以前のところで、とりあえず敏感に反応することを、語り手は的確に説明していたのであった。メロスは目の前の邪悪に対して、己を顧みず皮相的なところで反応してしまう、ただそれだけの愛すべき「単純な男」であった」
- (11) 戸松泉は、「走る」ことの意味——太宰治『走れメロス』を読む——ではメロスの迷いを「ただ死ぬために帰ることへの恐れが潜在していただけである」と指摘する。
- (12) 高塚雅の(『走れメロス』論—〈内的独白〉の考察)中京国文学二十五号 中京大学国文学会 平成十八年三月)に語り手の位置に対する考察がある。高塚は「語り手は最初からメロスに加担している存在だったのである」と述べるが筆者には「走れメロス」中の語り手は「加担」という単語では表現しきれぬほど様々な位置からメロスを語ると考えている。極めてシニカルなポジションもその一例である。
- (13) 田中実は「お話(プロット)を支える力——太宰治『走れメロス』」都留文科大学研究紀要三十八 平成五年三月の中で少女の緋のマントを捧げる行為を少女の求愛だとする。メロスが赤面したのは自分が少女に愛されていることを理解し、愛される喜びを感じ取ったから。そのことが恥ずかしかつたと解釈する。筆者も少女の行為は愛情表現、メロスの赤面はそのことの理解と解釈している。